

トラック 12-2

あるところにおばあさんがいて、スルタンのいる村に住んでいた。そのおばあさんは雌山羊と一緒に暮らしていた。その雌山羊は山で繋がれていたが、仔山羊を産んだ。小さい仔山羊は山を転がり落ちて、丘の麓にいたスルタンの山羊のところまで来てしまった。

朝になってスルタンが山羊の様子を見に来て、その仔山羊に気がついた。彼は自分のところの山羊が産んだのだろうと思った。ところが、彼の山羊は雄しかいなかった。スルタンは仔山羊を取り上げて自分の山羊と一緒にしてしまった。

おばあさんが雌山羊の様子を見にやって来て、それが仔山羊を産み、仔山羊がスルタンの山羊の中にころがり落ちたのを知った。彼女はスルタンに言った：「閣下、その仔山羊を私に返して下さい。それは私の雌山羊が産んだもので、あなたの山羊が産んではいません」。

スルタンは答えた：「いや、私は仔山羊を自分の山羊たちの横で見つけたのだから私のものだ」。

彼らは言い争ったが最後はおばあさんが折れた。彼女が隠者のところに会いに行くと、彼は言った：「私は、あんたが仔山羊を取り返すのに助けになるだろう人物を知っている。その人物はイブナシィーヤという名前だ。イブナシィーヤの畑に行きなさい。彼が上から来るようだったら、下から耕して行けば会えるだろう。もし、彼が下から来るようだったら、上から〔耕して〕行けば会えるだろう」。

おばあさんはイブナシィーヤの畑に行き、耕し始めた。イブナシィーヤは上の方から耕して来たので、おばあさんは下から耕して行き、とうとう鶴嘴がぶつかった。二人とも驚いて、イブナシィーヤが尋ねた：「僕の畑で何をやっているんです？」。おばあさんは答えた：「この畑はあんたのじゃなくて私のだよ」。

彼らは言い争い、とうとうイブナシィーヤが言った：「ちょっと待って下さい。どうしてここにやってきたのか言って下さい。多分大事なことがあるに違いないのだろうけど僕は知りませんから」。

おばあさんは答えた：「イブナシィーヤ、私の雌山羊が山で仔山羊を産んだのだけれど、仔山羊がスルタンの山羊のところまで転がり落ちてしまい、スルタンはそれ

を自分のものだと思っている。私はスルタンに返してくれるようお願いしたけど、断られた」。

イブナシィーヤは言った：「家に戻りなさい。今日は土曜なので金曜まで待って下さい。あなたが仔山羊を取り返せるための策があります」。そこでおばあさんは家に戻った。

木曜の午後になるとイブナシィーヤはたくさんの青バナナ、米、塩を用意し、ジャリホ〔出産したばかりの女性に贈る贈り物〕のためにあらゆるものを集めた。

金曜日になり、皆がモスクに行く時になるとイブナシィーヤは若者たちを集めた。彼はそれらの食べ物すべてを運んで、モスクの前を歩いて行ったり来たりした。それを見てスルタンは尋ねた：「お前は今日一体何をやっているんだ？」。イブナシィーヤは答えた：「僕ですか、父さんが出産をしたのでジャリホを贈るところです」。

「お前の父親が出産した？」。

「はい、うちの父さんが出産して僕がジャリホを贈るところです」。

「出産したのは、お前の父親なのか、それともお前の父親の妻なのか？」。

「父の方です」。

「いいや、男は産まないものだ。産むのは女だ」。

「それでは閣下、【男は産まず、女が産む】と紙に書いて署名して下さいますか？」。

スルタンは紙に、【男は産まず、女が産む】と書いた。イブナシィーヤは言った：「それでは、おばあさんの仔山羊を返して下さい。何故なら、それを産んだのはあなたの雄山羊ではなく、仔山羊はおばあさんのものだからです」。スルタンは仔山羊をおばあさんに返しに行った。